

そこは屋上。

少女達が青春を謳歌する、学園の屋上。

放課後、そこで夕涼みをしながら、
街の景色を見渡すのが少女の日課だった。

その日もいつものように
暮れゆく街を一人ぼんやり眺めていた。

故に少女は気づかなかった。


少女のはるか頭上、
ほんの小さな时空の裂け目から
”それ”が侵食しつつある事に。

気づいた時には既に、
その手足を絡め取られていた。

何に？

それが何かなど、少女が知るはずもない。





屋上で一人の少女を
食らった異界生物は
通気口を通り
下階へと侵攻を
開始する。

次に襲われたのは、
今まさに屋上へ
向かおうとしていた
一人の少女。

最初に襲われた少女の
友達である。

天井から伸びた触手に
突然身体を絡め上げられ、
すぐさま口にも触手がねじ込まれ、
悲鳴もあげられない。

…学園の最上階に教室や部室等はなく、
放課後は人通りもほぼ無いため、
声を封じられてしまえば
誰に気づいてもらおう事すら出来ない。

絶体絶命である。

程なくして、3人目の少女が餌食となる。

果実のように天井からぶら下げられ、
痙攣する少女に気づき、うっかり近づいてしまった。

それが”只ならぬ事態”であると気づき、
咄嗟に階下へ引き返して
助けを呼ぼうとした時にはもう遅かった。



天井を這うその一部は、
既に少女の頭上に到達していたのだ。

瞬く間に手足を絡め取られ、
制服も引き裂かれ、
あられもない姿を廊下に晒す少女。

何が起きているのか、
理解する猶予すら与えられず。

少女の胴を覆う競泳水着も、やはり粘液に触れば溶けて穴が空いてしまう。完全に溶け落ちないのは、これまでの少女達が着ていた制服とは、素材が違うためだろう。

ギチッ

ぐぐぐ

放してよっ!
このっ……!!

水泳で鍛えた身体を以てしても、こんな格好で拘束されてしまつては思うように力を込めることも出来ず、振り解く事は叶わない。

プールにはまだ数名の生徒が残っているが、隣室の給水ポンプの音にかき消され、悲鳴は届かないだろう。

排水管をくぐり抜け、更衣室から一步出れば、そこには当然プールがある。

水泳部の少女達は翌日の試合に備えて早々に帰宅。

つい先程、更衣室で襲われた少女が最後の一人。

今プールに残っているのは病欠の補習などで居残りをしているほんの数人。
……恰好的である。

無数の排水管が張り巡らされたこの環境も、そっと忍び寄り襲いかかるには好都合だ。

無論プールで襲われたのは一人ではない。

エスカレーター式一貫校であるこの私立校の
プールなどの共用施設は
様々な学年の生徒が利用する。


ここにいた大半が同時に捕食され、
このプールのあちらこちらで、
今まさに卵を産み付けられている。

助けに来るべき大人の教師達は、
ここが襲われる少し前に姿を消してしまった。

少女達はその事に違和感を覚える頃、
侵食、捕食は一斉に開始され、
故にこの場にいる誰もが”犠牲者”であり、
救出の側に回れる者などいない。

絶望が支配するプールで、この少女もまた……





プールにいた少女達を
全て喰らい尽くした後
外堀を埋めるように
校庭へと侵食を開始。
何倍にも増殖しながら…
校舎を囲うように
侵食範囲を広げれば、
校舎内の生徒達は
たとえ騒ぎに気づいても
脱出する事はもう
不可能になる。

しかし学園内は…
未だ静かなものだ。

この怪異の姿を見た
全ての人間は捕食され、
知性を奪われているため…
これだけ犠牲者が出ていても
未だ騒ぎになっていないのだ。

いずれ誰かが気づき、騒ぎになるだろうが、
その時にはもう逃げ場などどこにもない。
残存する全ての少女のバッドエンドは確定しているのだ。

無論、捕らえて終わり、
であるはずがない。

トラップとしてあちこちに
仕掛けられた変異種達も
生殖能力を有している。

巨大な食虫植物のような
その胴体部分の内側には
無数の触手達が犇めき、
餌を欲し蠢いている。

少女に尻に
張り付いたそれらが
肛門を拡げてゆく。



学園の外堀の囲い込みは終わった。

もうこれで誰も逃げられない。

一匹たりとも雌を逃しはしない。

この学園に残存する全ての雌を、

喘ぎ絶頂し孕み

産むだけの苗床に。

異界生物による

この侵攻からは

そんな言外の

意思がはつきりと

伝わってくる。

うじゅ...

う...

うじゅ...

散り散りに

逃げ惑う

少女達を、

追いかけて、

追い詰め、

捕らえ、

衣服を剥ぎ、

蹂躪する。

な...な...

なんですか

これ...!?!?

図書委員を務める

この少女もまた。

襲われ、蹂躪された少女達の
その子宮から生まれ出た触手生物達は
累乗的に、加速度的に増殖を続け、
学園面積の大部分を埋め尽くす程になった。

自然との調和を重んじるカトリック系の女子校は
山の中腹にあり、専用バスしか交通手段がないため、
「この惨劇」に気づく者は外界に一人としていない。

くっ……!!
一体、何なのよ
これっ!!!?

孤立無援の少女達が、
ひとり、またひとりと犠牲になってゆく……
何人かの女生徒達が白目を剥いて痙攣し、
獣じみた喘ぎ声を延々発する教室で、
また一つの花が散ろうとしている。

うっしゅ

うっしゅ



それらが「少女の胎内」ではなくプールの中で発芽し成長した変異種、
いわば触手生物のなり損ないがこのゼリー状の生物である。
異界生物の細胞は、様々な物質と融合し、それぞれ独特の変容を遂げてゆくのだ。

そしてコンピューター室では、
一人居残り調べ物をしていた生徒がまた一人犠牲に。

ヘッドフォンをしながら作業をしていた為、
外の混乱に気づくことが出来なかったのだ。

ギチッ

気づいた時には、蜘蛛の巣に
引っかかったカエルのような格好で、
教室内に釣り上げられていた。



レオタードの股間部分を掴んでめくり上げ、
割れ目を確認する。

怪物に手足を絡め取られても、
まだどこか実感の薄かった少女だが、
自らの秘部を露出させられ、
ようやく状況に認識が追いつく。

追いついたところで、
全ては遅すぎたのだが。

ちよつと……
やだっ……!!
離してっ!!

ギィ

ギィ

ガ

襲われる前に知覚し、
全力で逃げなければならなかった。

そうできなかつた時点で、少女の未来は決していた。

どのような未来かは、語るまでもないだろう。

保健室の天井からは、少女が吊るされていた。
いや、保健室だけではない。
学園の至る所で同じことが行われていた。
生殖機構を持たぬ触手の手足達が、
校内に残存する少女達を捕縛し吊るしておく。
そして他の娘への種付けを終えた異界生物が、
吊るされた少女達を次の苗床とするのだ。

うっ...



そして自我を有する生徒の残存数は遂に0となった。
中にはこの少女のように、
拘束されず校舎内や校庭を徘徊する生徒もいるが、
見て分かる通り理性や知性は既に消失している。

これは少女……”だったもの”……

一見自律運動を行っているように見えるが、
少女の頭部に張り付いた寄生型の異界生物が
脳を直接弄くり操っているに過ぎない。

伸び切った肛門から液体を垂れ流し、
腰をへこへこと前後させながら、
覚束なげにグラウンドを徘徊する少女の肉体。

何かを探しているようにも見えない。

無論少女が、ではなく、

少女の頭部に寄生した異界生物が、だ。



少女達が青春を謳歌する学園を
突如襲った異界生物の群れ

剣も魔法も存在しない現代社会を生きる

”普通の少女達”に抗う術などない。

捕獲され、体の隅々まで蹂躪され、

異界生物の子を産むためだけの

苗床に作り変えられていく少女達

脳を一部分だけ吸いだされ
改変された少女達は、
快樂以外の全ての感覚が遮断され
自我も、知性も剥奪される

絶望と快樂だけ

そこにあるのは、

その「救助」は、
「救済」ではない。
「確認」は、
「処置」ではない。
「学園」は、
「本部」ではない。

侵食が進み、肉体の変容が始まっているのだ。

その為同化侵食を行い、自らの突出した生
獲物に分け与え、生き長らえさせるのだ

全て枯渇するまで、
何度でも、何度でも、

おんおん
おおっ
ほぎゅ

あぁア
あッア
あ!!

平均して人間の雌は、
30万程の卵子を
保有している。

後にはもう
語る必要もないだろう。

少女の、人間と

自身の細胞、その
少女の細胞、その
融合させては、異界生物は、獲物
の細胞、その
少女の細胞、その
融合させては、異界生物は、獲物

腹の中で
か出てるっ
てるっ...

少女の胎
イボ状の胞子達が
次々と弾けて新たな生命の元となる。

少女の足が
折断する。
少女の卵巣と結合す
る。

異界生物は、獲物
の細胞、その
少女の細胞、その
融合させては、異界生物は、獲物

おお
おお
おお

おお
おお
おお